

# 碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

文学や本が育む交流と地域への愛着

112

2025 March

2023（令和5）年10月31日、岡山市は「ユネスコ創造都市ネットワーク」の文学分野における加盟都市に認定された。坪田譲治による児童文学をはじめ、文学に関するさまざまな地域資源を活用した取り組みが評価された結果であり、同ネットワークへの加盟申請を岡山市に提言した者の一人としてうれしく、誇らしく思う。

国際連合教育科学文化機関（UNESCO）の事業であるユネスコ創造都市ネットワークは、創造性を核とした都市間の国際的な連携で地域の創造産業の発展を図り、都市の持続可能な開発を目指すものである。7分野（デザ

イン、クラフト&フォークアート、メディアアート、音楽、食文化、映画、文学）があり、日本ですでに6分野・10都市が認定されていたが、文学分野では岡山市が国内初の加盟認定となった。これを機に、岡山市では「文学創造都市」を標榜し、「文学による心豊かなまちづくり」のさらなる推進を目指すしている。

私は1998（平成10）年に、出身地である岡山市のノートルダム清心女子大学の教員として着任した。同じ岡山市出身の坪田譲治について論文を書いていたことから、2001（平成13）年には岡山市から依頼され坪田譲治文学賞を含む「岡山市文学賞」の運営委員を拝命した。

郷土の作家や作品は  
市民の郷土愛と誇りを育む

郷土の作家や小説の舞台など、文学を核にした地域づくりに取り組む自治体は全国に多数存在している。その代表的な都市として、岩手県花巻市が挙げられる。宮沢賢治を郷土の誇りとし、1990（平成2）年に宮沢賢治学会イーハトーブセンター<sup>※3</sup>を設立した。市民一体となったまちづくりを展開しており、宮沢賢治にまつわるスポットが

点在するなど、まちは宮沢賢治であふれている。大学時代から宮沢賢治の研究を始め、たびたび花巻を訪れていた私は、賢治が市民から愛され、また、賢治によって市民の郷土愛が育まれていることを肌で感じ、文学の力に圧倒される思いを当時から抱いていた。

坪田譲治文学賞は、日本の児童文学の第一人者として活躍、岡山市名誉市民となり、1982（昭和57）年に92歳で亡くなった坪田譲治の業績をたたえて岡山市が1984（昭和59）年に制定した文学賞である。坪田の作品は、昭和10年代に新聞に連載された代表作の『風の中の子供』や『子供の四季』をはじめ、子どもの世界と大人の世界を交流させた独自の世界観を持ち、子どもと大人、両者の視点で楽しめることが特徴である。このことから、賞は9月1日を基準日として1年間に全国で刊行された文学作品の中から「大人も子どもも共有できる世界」を描いた、優れた作品に贈られている。

POINT OF VIEW  
視点

豊かな心を育み、  
世界とつながり合える力を持つ文学

profile

山根 知子  
〈やまね・ともこ〉

岡山市出身。早稲田大学第一文学部卒業。日本女子大学大学院文学研究科博士後期課程修了。梅光学院大学大学院 博士（文学）。専門は日本近代文学および日本児童文学。著書『宮沢賢治 妹トシの拓いた道—「銀河鉄道の夜」へむかって』（朝文社、2003年）により第14回宮沢賢治賞奨励賞（岩手県花巻市）受賞。2001年より坪田譲治文学賞と市民の童話賞の運営を担う岡山市文学賞運営委員。『人物書誌大系 47 坪田譲治』（日外アソシエーツ、2022年）編著。2024年より岡山ユネスコ協会理事。



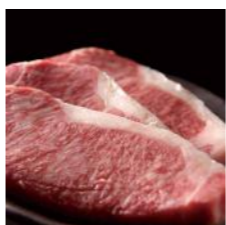
文学や本が育む交流と地域への愛着



p.6



p.12



p.14



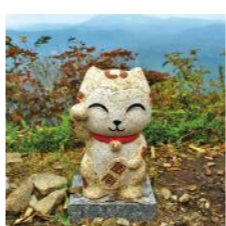
p.20



p.24



p.26



p.28

碧い風  
あおいかぜ

きらめきの地域デザイン

112

2025 March

CONTENTS

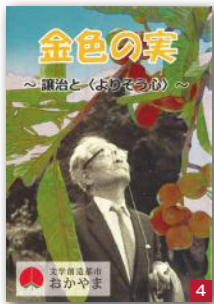
- 14 地域に生きる企業家群像<sup>12</sup> 株式会社HANAFUSA 代表取締役 花房稔（鳥取市）
- 17 キラリ、輝く元気企業<sup>85</sup> 株式会社英田エンジニアリング（岡山県美作市）
- 20 夢紡人／ゆめつむぎひと<sup>108</sup> やまぐちシールドル 代表 原田尚美（山口市）
- 23 この名酒にこの一品<sup>35</sup> 天穂生酛純米酒 シジミのんにく醤油漬け（鳥根県出雲市）
- 24 伝統芸能を継ぐ人ひと<sup>13</sup> 岩国行波の神舞（山口県岩国市）
- 26 オンラインのご当地ミュージアム<sup>5</sup> 湯本豪一記念日本妖怪博物館三次もののけミュージアム（広島県三次市）
- 28 山をあるく<sup>23</sup> 琴引山（鳥根県）

表紙写真／春に満開を迎える阿東地域の徳佐りんごの花  
表紙写真提供／長門峡梨と徳佐りんごのお花見ピクニック実行委員会  
目次写真提供／岡山市、中原中也記念館、株式会社HANAFUSA、やまぐちシールドル、竹重 満憲・中野 英治、三次もののけミュージアム、一般社団法人 飯南町観光協会  
デザイン／有限会社シフト

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていく媒体にしていきたいと思っています。強くないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

- 3 | 視点 | 豊かな心を育み、世界とつながり合える力を持つ文学 山根知子（ノートルダム清心女子大学 文学部 日本文学専攻 教授）
- 6 世界で認められた文学のまち岡山市が推進する「文学による心豊かなまちづくり」 岡山市
- 9 本を中心に職種や世代を超えた交流を生み、まちの書店を活気づける NPO法人本の学校（鳥取県米子市）
- 12 詩人・中原中也の世界を多角的に広げ後世につなぐ 中原中也記念館（山口市）

特集 文学や本が育む交流と地域への愛着



1 2 3 2017年度に始まったツボジョーワールド探検隊。19年度は坪田の母校の小学校児童にツボジョーカルタを配布。20年度は坪田ゆかりの地を巡るバスツアーを開催。23年度は岡山の河川をテーマに活動、パペット劇を披露するなど、楽しみながら坪田文学を通して地域を学ぶ機会を創出している

4 毎年、学生たちが冊子にまとめ、坪田とその作品を分かりやすく紹介している

写真提供／ノートルダム清心女子大学

文学によるまちづくりを支える「ツボジョー」

ノートルダム清心女子大学教授に  
着任した当時の私は、「宮沢賢治の研  
究者として花巻市を見てきた自分に岡  
山市で何が出来るか」を思索してい

た。そんな折、岡山市で文化振興を推  
進する部署に所属する文学賞担当者か  
ら「坪田譲治についてよく分からない  
ので普及活動がしづらい」という声を  
聞いた。当初は坪田の岡山での幼少期  
の暮らしや作品の舞台などの実態があ  
まり把握できていない状態であった。  
そこで、自分が坪田譲治の研究を土台  
づくりから進めようと決意したのであ  
る。まずは坪田が過ごした地域を訪ね  
て生家を調査するフィールドワークか  
ら始め、市と研究会を行った。研究を  
積み重ねるうち、私の教え子たちも地

域で坪田作品の朗読会を行ったり、ラ  
ジオドラマを制作したりと、普及活動  
に参加するようになった。

2017（平成29）年には「ツボ  
ジョーワールド探検隊」を結成した。  
私の授業で教えていたことを地域につ  
なげようと有志を募り、集まった学生  
で岡山市の「大学生まちづくりチャレ  
ンジ事業」に応募して始めた活動であ  
る。初年度のメンバーは、地域を活気  
づけるべく商店街振興などを意識し、  
坪田作品に出てくる商店やゆかりの地  
を巡るスタンブラーで、坪田の足跡  
を知ってもらうことに取り組んだ。翌  
年以降も意志を継いだ学生の手で継続  
され、坪田作品の舞台を巡る一日バス  
ツアーや、坪田が愛した川をテーマに  
環境やSDGsを考える催しなどを展  
開。また、テーマソング「譲治のおか  
やま」やツボジョー体操・ツボジョー  
カルタを考案し、地元の学校などで子  
どもたちと楽しみながら坪田を通じて  
地域について学ぶ場をつくるなどして  
きた。こうした有志の活動が大学に評  
価され、同探検隊は2022年度から  
開講科目「総合探究」の授業となった。  
以降は坪田文学の精神を福祉にも生か  
し、高齢者や障がい者に寄り添う活動  
へと幅を広げており、これらの活動も

※1 クラフト&フォークアート…  
歴史、宗教、民族性、地域性など土地  
固有の文化を背景に生まれた芸術形式  
で、建築、音楽、ダンス、手工芸など  
広範囲に及ぶ

※2 メディアアート…  
コンピュータや電子機器など新しいテ  
クノロジーを利用したアート

※3 宮沢賢治学会イーハトーブセンター…  
宮沢賢治とその作品の愛好者・研究者  
が情報を共有し交流する場として設立  
された。イーハトーブとは、宮沢賢治  
による造語で「心象世界にある理想郷」  
を指し、そのモチーフは岩手県といわ  
れる

ユネスコ創造都市ネットワーク加盟へ  
向けた提言書に記載され、機運醸成に  
貢献した。

文学を核にしたまちづくりの推進力  
となるのは、目には見えづらい郷土へ  
の愛着と誇り、他人への思いやりや人  
格の育成といった「心づくり」の面が  
大きい。この力は、政治や経済などの  
利害を乗り越えて、作家や作品への共  
感により人と人を結び付け、SDGs  
の目標の達成にも関わるなど大きな可  
能性を持つ。

その実践の場となるのがユネスコ創  
造都市ネットワークの活動である。文  
学分野で国内初の加盟都市となった岡  
山市の使命は、世界の加盟都市や国内  
の都市とつながりながら、市民が文学  
によって豊かな「心づくり」をするこ  
とで、生きがいを実感できるまちづく  
りを実現することだと私は考えている。

こちらには、岡山市在住・在勤・在  
学者を対象とした、公募による文学賞  
だ。小中学生の部と一般の部があり、  
入賞作品は作品集となり、市内を中心  
に書店などで販売される。子どもを含  
む市民の創作意欲を高めるのが狙い  
だ。岡山市ではこの二つの賞を「岡山  
市文学賞」と位置付け、「文学による  
心豊かなまちづくり」を推進している。

ユネスコ創造都市ネットワークについて

創造性を核とした都市間の国際的な連携で、地域の創造産業  
の発展と都市の持続可能な開発を目指すことを目的にユネス  
コが2004年に創設した事業。創造的な7分野（デザイン、  
クラフト&フォークアート、メディアアート、音楽、食文化、映画、  
文学）が対象で、2024年11月1日時点で、世界350都市  
が認定加盟。うち、文学分野ではイギリスのエディンバラや  
オーストラリアのメルボルンなど53都市が加盟している。

日本国内のユネスコ創造都市		
分野	都市名	加盟年
デザイン	神戸市（兵庫県）	2008
	名古屋市（愛知県）	2008
クラフト&フォークアート	旭川市（北海道）	2019
	金沢市（石川県）	2009
メディアアート	丹波篠山市（兵庫県）	2015
	札幌市（北海道）	2013
音楽	浜松市（静岡県）	2014
	鶴岡市（山形県）	2014
食文化	臼杵市（大分県）	2021
	山形市（山形県）	2017
映画	岡山市（岡山県）	2023

(2024年11月1日時点)

岩手県花巻市

宮沢賢治のふるさと花巻市では「賢治まちづくり課」を設け、  
賢治をテーマにさまざまな活動を行う芸術、農業、観光等の  
団体や有識者で構成する「賢治のまちづくり委員会」と協働  
し、官民一体でまちづくりを進めている。



愛媛県松山市

正岡子規や高浜虚子など多くの文人・俳人を輩出し、夏目漱  
石「坊っちゃん」や司馬遼太郎「坂の上の雲」などの小説の  
舞台で知られる松山市は、豊かな文学的土壌を生かして「こ  
とばのちから」をキーワードにまちづくりを展開している。



文学賞や文学に関する顕彰は、作家  
や文学研究者などの輩出や躍進を後押  
しし、文学の振興に寄与する。岡山市  
のように自治体主催の文学賞も多く、  
地域文化の発展やまちづくりの仕掛け  
としても期待される。

例えば、先に挙げた花巻市では「宮  
沢賢治賞」「イーハトーブ賞」を主催  
し、賢治に関する優れた研究・評論・  
創作や実践的活動などを毎年顕彰して  
いる。

金沢市は、全国に先駆けて制定した  
自治体発の文学賞として1973（昭  
和48）年から「泉鏡花文学賞」を主催  
している。金沢に縁のある市民を対象  
とする公募型の「泉鏡花記念金沢市民  
文学賞」と合わせて「鏡花文学賞」と

称しており、岡山市同様、作家の輩出  
だけでなく市民の文芸活動にも力を入  
れる。泉鏡花文学賞の選考委員である  
小説家の五木寛之さんは、坪田譲治文  
学賞の選考委員でもあり、その際「坪  
田文学を大切に後世につなげていき  
たい」との思いを語ったことが私の心に  
深く刻まれていく。

また、夏目漱石の小説「坊っちゃん」  
の舞台となった松山市は、その文学的  
土壌を生かし、文化振興と都市のPR  
を目指して公募型の「坊っちゃん文学  
賞」を主催している。高校在学中に応  
募して1991（平成3）年の第2回  
大賞受賞者となった中脇初枝さんは、  
2012（平成24）年に坪田譲治文学

賞も受賞した。昔話や民話に着想を得  
た作品や絵本も執筆している中脇さん  
は坪田譲治との親和性が高く、その後、  
同賞の選考委員も務めている。高知出  
身だが「岡山は第二の故郷」とも語り、  
文学でつながる絆を感じる。

そして北九州市は、公募型の「林芙  
美子文学賞」を主催するとともに、小  
学生と中学生を対象にした「子ども  
ンフィクション文学賞」を実施してい  
る。体験から感じたことを、創作を  
加えずに子どもたち自身の言葉で表現  
してもらったものだ。初回の大賞はいじ  
めや不登校の体験を綴った内容であっ  
た。大賞以外の受賞作も読んだが、ど  
れも心に訴える作品であった。作品に

は多感な時期の経験から抱く孤独や悲  
しみなどつらい思いを記したものが多  
く、その思いを整理してこれからのど  
う生きるか見つめ直すとうとする前向き  
さが伝わってくるのだ。誰しも、自分  
の気持ちや文字に表すことで、自身の  
心を客観視して整理でき、心理的に落  
ち着くことがあるだろう。この力は、  
音楽療法という言葉があるように「文  
学療法」と言っても過言ではないと私  
は思う。とても意義深い賞だと感じた。  
文学には人の心を育てる大きな力が  
あるが、その力は読み手だけでなく、  
書き手にも作用するのだ。書き手は書  
くことにより過去を振り返ったり内面  
を見つめたりしながら、書き上げる過



1 2 旧内山下小学校において土日の2日間開催される「おかやま文芸小学校」は、多くの独立系書店、雑貨店、ワークショップ実施団体、カフェなどの出店にぎわう

3 4 体育館で行われる「おかやまZINEスタジアム」では事前に募集した出店者が集まり、展示販売のほか、トークイベントや読み聞かせなども実施

おかやま文学フェスティバル 2024秋-2025春	
2024年秋	10/18(金) うったてサロン at 岡山芸術創造劇場ハレノワ
	11/24(日) おかやま表町ブックストリート at 表町商店街
2025年春	3/2(日) おかやまZINEスタジアム at 旧内山下小学校
	3/8(土) 坪田譲治文学賞贈呈式 at 西川アイプラザ
	3/15(土) おかやま文芸小学校 3/16(日) at 旧内山下小学校

主催 岡山市、岡山市文学賞運営委員会、瀬戸内ブッククルーズ実行委員会

「岡山市では、これまで40年にわたって『坪田譲治文学賞』と『市民の童話賞』を開催してきました。そもそも岡山は『桃太郎のまち』であり、幼少期から童話や物語に親しみを覚えやすい。さらに市内の公立小中学校のほぼ全てに専門資格を持つ学校司書が配置され、朝読書の時間も設けられるなど、子ども

たちの間で受け継がれ育まれてきた、文学の土壌だ。背景にあるのは、これまで岡山の人たちの間で受け継がれ育まれてきた、文学の土壌だ。2022年3月、市民を代表する有識者から、ユネスコへの加盟申請の検討を含めた「文学による心豊かなまちづくり」のさらなる推進に向けた提言書が岡山市に提出された。これをきっかけに、同年5月には「文学創造都市岡山推進会議（文学によるまちづくり部会）」を発足。この会議には地元の

「おかやま文学フェスティバル」が行われるようになったのは、2022（令和4）年から岡山市が「ユネスコ創造都市ネットワーク」を目指すようになったことがきっかけである。その後、翌年10月にユネスコから認定され、映画、音楽、食文化など7分野のうち、文学分野での加盟は、国内では岡山市が初となった。

もたちが文学に触れる機会も多いんです。また、岡山市立図書館は地元出身の実業家の寄付によって大正時代に設立された歴史もあり、県立図書館では入館者数・個人貸出冊数が何度も全国一位になっています。こうした背景もあり、読書に親しむ習慣ができたのでしよう。そう話すのは、岡山市文化振興課で文学創造都市推進担当課長を務める門田陽子さんだ。

出版社、書店、図書館、文学館、大学、商工会議所、観光協会、マスメディアなど多様な分野の関係者が参加し、加盟に向けた議論が行われた。翌年の加盟実現後も、文学を活用した取り組みや事業をさらに推進すべく活発に意見が交わされる場として会は継続して開催されている。岡山市は、これまで以上に文学関連事業を産学官の連携により発展させようとしている。

### 関連事業に市民が積極的に参加

文学によるまちづくりの一環として、岡山市では、2023年度より「ライター・イン・レジデンス」事業にも取り組んでいる。一定期間、作家に滞在してもらい、創作活動を支援する取り組みで、2022年に第37回坪田譲治文学賞を受賞した人気作家の乗代雄介さんを3期にわたって岡山市に招いている。滞り期間中に、市民向けワークショップも開催。乗代さんと一緒に屋外を歩き、風景を文章でスケッチするという全3回のこの企画は、関東や九州からも参加者が集まる人気ぶりだ。2024年9月には、雑誌『うったて』を発刊した。「うったて」とは、書道で筆をおろすその瞬間の「起筆」を



表町商店街を会場に、一般参加者や県内外の古書店による古本市を開催する「おかやま表町ブックストリート」

## 世界で認められた文学のまち 岡山市が推進する 「文学による心豊かなまちづくり」

### 岡山市

子どもの頃から「桃太郎」で童話に親しみ、国内でもとりわけ読書習慣のある人が多いといわれる岡山県。もともと文学や本に関わる取り組みが盛んであったが、特に岡山市においては、2023（令和5）年に「ユネスコ創造都市ネットワーク」の文学分野における加盟都市に認定され、その動きはさらに加速している。

文／黒部 麻子

### 本と人に出会うためのフェスティバルを開催

2024（令和6）年11月の日曜の昼下がり。岡山市の表町商店街は、多くの人でにぎわっていた。古本やZINEの店が所狭しと並ぶ。立ち止まって品定めする人や、出店者と会話を楽しむ人、子連れで行き交う人もいて、客層も実にさまざまだ。この日開かれていたのは、「おかやま表町ブックストリート」だ。手持ちの古本やZINEを持ち寄り、フリーマーケット感覚で出店する一箱古本市と、県内外の古書店による古本市が同時に開催されていた。出店数は120を超えた。

この古本市は、瀬戸内エリアの独立系の書店や、本を愛する有志が立ち上げた「瀬戸内ブッククルーズ実行委員会」が中心となり、岡山市、岡山市文学賞運営委員会と共に主催する「おかやま文学フェスティバル」のイベントの一つだ。このフェスティバルは、本との出会いの場をつくろうと2022年度に始まり、3年目となった2024年度は秋と春の2回にわたって開催している。ZINEの制作者が一堂に会して展示販売する「おかやまZINE

※1 ZINE…個人や小規模のグループが自由な手法、テーマで発行する冊子や出版物



1995年の設立時から続く書店人教育講座。モデル書店で棚のレイアウト、本の並べ方などについて学ぶ参加者たち

## 本を中心に職種や世代を超えた交流を生み、 まちの書店を活気づける

### NPO法人 本の学校〈鳥取県米子市〉

書店員の学びの場を提供し、読書文化を広める活動も展開しているNPO法人 本の学校。全国各地で書店が減り続けている今、書店を開きたい人たちの背中を押しながら、書店を介してまちのにぎわいを復活させようとしている。

文／城市 奈那

### シンポジウムを機に 全国から注目

米子市を拠点とする「本の学校」は、鳥取・島根両県で書店を展開する今井書店グループの120周年記念事業として1995（平成7）年に誕生した。その構想の基となったのが、「書店人が社会的にその職能を認められるためには、日本にもドイツのような書籍業学校が必要」という3代目の今井兼文氏の遺志だった。書籍業学校とは、出版業全般について学ぶ職業訓練校（現在はメディアアカンパスと呼ばれる）で、ドイツで書店員になるにはこの学校を修了し、商工会議所の試験に合格する必要がある。

ドイツを視察した当時の今井書店の経営者たちは、日本でも書店・出版関係者が出版について幅広く学べる場をつくらうと、ドイツの学校をモデルに「本の学校」を設立し、その後5年間、「地域から描く21世紀への出版ビジョン」を総合テーマに「大山緑陰シンポジウム」を開催した。大山で合宿を行いながら、多様な分科会を開催するこのシンポジウムでは、出版、メディア、図書館、書店、教育、マスには著者や読者など、立場の異なる人



5 2024年9月発行の「うったて」創刊号  
6 「おかやま文学フェスティバル」の一環として2024年10月に開催した「うったてサロン」では、創刊を記念して作家の森まゆみさんを招き、講演会と交流会が行われた  
7 「うったてミーティング」と呼ばれる編集会議。中央に座るのは発起人で編集委員の吉備人出版代表の山川隆之さん。山川さんは「文学によるまちづくり部会」メンバーでもある  
8 9 ユネスコ創造都市ネットワーク文学分野の認定都市第一号である英国スコットランド・エディンバラで開催された国際会議には、37の認定都市から関係者が集結した（2024年10月）



写真左から岡山市文化振興課課長補佐の新居田克則さん、同課文学創造都市推進担当課長の門田陽子さん、同課主査の流尾正亮さん

おかやま文学フェスティバル X、Instagram公式アカウント @okayamabungaku

指す岡山の方言で、物事の始まりや心構えも表しており「文学のまちをここから」との思いが込められている。地元出版社である吉備人出版が編集を主導しつつ、市民から書き手を募り、ライターの教室と公開編集会議を開催しながら制作する。完成した冊子は県内の図書館や書店をはじめ、全国で無料配布される。反響は大きく、創刊号は1万部印刷し、翌月には7000部増刷したという。

また、絵本を通じて社会貢献も行っており、「アジアの子どもたちに絵本を届けよう！」というワークショップを小中学生向けに開催。絵本に翻訳シーンを貼って、厳しい環境で暮らす海外の子どもたちに送っている。このワークショップも、応募者多数で抽選になるほどの人気だ。

2024年10月には、ユネスコ創造都市ネットワーク文学分野の認定都市第一号となった英国スコットランドのエディンバラで、認定20周年を記念して国際会議が開催された。岡山市を含め、世界の37の文学創造都市から関係者が集まり、それぞれの活動状況が発表され、今後の取り組みについて意見が交わされた。

### 世界の文学創造都市とつながり 活字文化の可能性を拓く

「J・K・ローリングが『ハリー・ポッター』シリーズを執筆したことで知られるエディンバラでは、毎年8月に600もの文学イベントからなる『エディンバラ国際ブックフェスティバル』が開催されています。そうした海外の事例から多くの刺激を受けました。今後の岡山市の活動の参考にしたと思います」と、文化振興課主査の流尾正亮さんは参加した感想を語る。

国内では、1990年代後半から出版不況が続く、書店の閉店も相次いでいる。しかし、書きたい人、読みたい人は、決して少なくない。海外の先進事例に学びつつ、熱意ある地元関係者たちの協力により進められている岡山市の「文学による心豊かなまちづくり」は、新たな活字文化の可能性を切り拓いていくはずだ。

※2 エディンバラ国際ブックフェスティバル…1983年より開始された、世界の著名な作家約500人を招いて各種イベントを開催する世界最大の文学の祭典。芸術祭や演劇祭などと同時期に行われることもあり約25万人の来場者を集める



5 「生涯読書をすすめる会」では作家を招き定期的に講演会を開催。2024年は絵本作家で鳥の巣研究家の鈴木まもる氏が登壇した  
6 20回開催されている広島大学文学部との「文藝学校」。2024年はNHK大河ドラマの影響もあり、装束部と「源氏物語」をテーマにした講座が人気で、募集開始後すぐに定員に達した  
7 鳥取市内で開かれた座談会では、SHEEPSHEEP BOOKSオーナーの高木善祥さんと、「本の学校」の創設者で現在は顧問を務める永井伸和氏がまちの書店の今後や本のある暮らしについて話し合った

講演会を開催した。併せて、鳥取県図書館大会では、本の学校文化祭実行委員会として分科会を主催。2024（令和6）年7月の大会では、「あらためて、まちの書店を考えよう」というテーマで分科会を開き、県外からも参加者を募って、相互交流を図った。

また、2005（平成17）年からは、広島大学文学部と、地域に開かれた市民講座「文藝学校」を毎年共催している。2024年は「豊かな人間性を培う人文学」をテーマに東洋史学や倫理学、比較日本文化学などの教員が講座を開催した。講座が終わった後には、文学部を志望する高校生の受験相談会を開いているのも特徴だ。

鳥取市では、日本中から本好きな人や書店員が足を運ぶ聖地として知られた定有堂書店が、惜しまれながら2023年に閉店した。本によって人と人をつなぎ、地域に文化を根付かせようとしていた同店オーナーの奈良敏行さんの足跡を追うように、

2024年にこのビルの2階に古書店「SHEEPSHEEP BOOKS」がオープンした。店主を務める高木善祥さんと「本の学校」で、まちの書店について考える座談会を開催した。

また、境港市では、市職員有志を中心としたまちづくり団体「はまのめ」と協働し、本と人をつなぐ場として機能している店舗を巡るまち歩きを行った。

「まちの書店についてみんなで考えるような取り組みが今後でもできたらと思っています。本に直接関わる仕事でなくても、何かしら自分が大事にしていく本があったりするのは、本を共通項に異業種の人が交流できる可能性



NPO法人 本の学校 副理事長の前田昇さん

NPO法人 本の学校  
鳥取県米子市新開2-3-10  
<https://www.honnogakko.or.jp/>

「書店振興には、トップダウンだけでなく、地域から声を上げていくことも大切。これからの子どもたちのために、できるだけ地域に書店を残していきたいです」と前田さん。

書店を拠点に、世代間交流やまちのにぎわいにつながる場を生み出していきたいと考えている。

### 人と人をつなぐ まちの書店の存在

「本の学校」をきっかけに広がった活動はいくつかある。毎朝始業前の10分間、児童や生徒が自分の好きな本を読み、心を落ち着かせる「朝の読書」運動もその一つだ。

「朝の読書」は千葉県の高校教諭だった林公先生が発案し、大山緑陰シンポジウムで発信された取り組みであり、今では多くの学校で導入されています。

「朝の読書は大山で生まれた」と林先生は話されていましたと、「本の学校」副理事長の前田昇さんは語る。

乳幼児健診の際に、親子に絵本をプレゼントして一緒に読み聞かせ体験を楽しむブックスタートも同様だ。地域で絵本の読み聞かせや文化活動を行う人たちが会員として参加している「生涯読書をすすめる会」が、イギリス・バーミンガム発祥のブックスタートを日本で立ち上げようとしていた佐藤いづみ氏の講演会を開催したことで広く知られるようになり、今では全国の約

6割の自治体で実施されている。

小さな書店を開きたい人が増加

「本の学校」は2012（平成24）年に今井書店より独立し、NPO法人となった。1995年の設立時より続く毎春開催の「書店人教育講座」は、現在も主要事業の一つとなっており、時代に合わせ、講座内容や形式を変化させている。

2003（平成15）年時点で全国に2万880店あった日本の書店数は、2023（令和5）年には1万918店と、20年で半数近く減少しており、書店のない地域も増加している。

「本の販売だけでは収益が上がらない

書店人教育講座では、書店だけでなく、図書館についての講座も開かれている。「本の学校」では鳥取県立図書館と連携した取り組みも行っており、2022（令和4）年から始まった「本の学校文化祭」では、県立図書館の職員をはじめとした県内の有志に実行委員会に参画してもらい、それぞれの得意な分野を生かしたワークショップや

### 図書館や教育機関との連携

書店人教育講座では、書店だけでなく、図書館についての講座も開かれている。「本の学校」では鳥取県立図書館と連携した取り組みも行っており、2022（令和4）年から始まった「本の学校文化祭」では、県立図書館の職員をはじめとした県内の有志に実行委員会に参画してもらい、それぞれの得意な分野を生かしたワークショップや



1 出版、マスメディア、図書館、書店、教育など、本や出版に関わるさまざまな人が、5年間で延べ2,000人参加した大山緑陰シンポジウム  
2 大山緑陰シンポジウムでの「朝の読書」の分科会。「朝の読書」はこのシンポジウムを契機に広がった  
3 現在は、毎年秋に東京でもシンポジウムを実施。独立系書店の講座が人気を博している  
4 鳥取県米子市にある「本の学校」

ため、カフェを併設したり、雑貨を販売したりと、業態を複合化していくことで書店の機能を維持しているのが近年の傾向です」と前田さんは説明する。

その一方で、好きなジャンルの本を並べた自分らしい書店を開きたい、カフェやショップに書店のスペースを設けたい、古書店を始めたいといった従来の書店とは趣が異なる、小さな書店を始めたいという人が増えているという。

「書店人教育講座でそういった人を対象に、地域に根差した書店の開業入門講座を開いたところ、オンラインで480人が参加しました。これは新しい傾向で、書店を開いてみたいという人に情報や経験の場を提供することもわれわれの役割だと意識しています」

# 詩人・中原中也の世界を 多角的に広げ後世につなぐ

## 中原中也記念館〈山口市〉

2024(令和6)年に開館30年を迎えた中原中也記念館。中也がキャラクターとして登場するコミックやアニメが増えたことで、生家跡に立つ記念館を訪れる新しいファンが増え、来館者層も変化してきた。記念館では中也の詩の世界を後世につなぐため、地域内外にその存在を広める取り組みを続けている。

文／古村 亜希子



前庭のカイヅカイブキの木は、中也の幼少期から残る



館内の展示では、資料を通じて中也の業績と生涯などを紹介

### 近年変化してきた来館者の数と層

「汚れつちまつた悲しみに……」「サーカス」などの詩で知られる中原中也(1907-1937)のふるさと、山口市湯田温泉に中原中也記念館がある。1994(平成6)年、生家であった中原医院の跡地に山口市が設置し、現在は公益財団法人山口市文化振興財団が運営する。生家は1972(昭和47)年に火事で焼失したが、同館ではその際に運び出された原稿や遺品などの貴重な資料を公開している。中原中也は30歳という若さで亡くなり、没後約90年が経つが、近年、来館者の数や層に変化がみられる。

「中也」という人物や中也の作品がコミックやアニメに登場し注目されたことで、ここ10年、若年層や海外のファンが増え、担当・細田萌美さんは話す。中でも、2013(平成25)年に始まり、今なお連載が続く人気コミック『文豪ストレイドッグス』(KADOKAWA)は、2016(平成28)年にアニメ化され、その後映画化もされた。中也だけでなく太宰治や芥川龍之介ら、名だたる文豪たちが、実際に残るエピソードや作品に沿った設定のキャラクターとして登場するのが特徴だ。コミックが注目される中、地域を巡るスタンブラリーなど中也生誕110年を記念してイベントを行った2017(平成29)年の企画展「コミックのなかの中也」開催

期間中の来館者数は、通常の約3倍を記録した。また、来館者が増えた背景には別の要素もあるようだ。「以前は『自身の内面を詩で表すことは特定の人の表現方法』と捉えられることもありましたが、中也の影響を受けたアーティストらの存在や、SNSの普及もあってか、昨今、気持ちを言葉で表現することはかっこいいとされる時代に変化したように思います。短歌や現代詩は今、人気傾向にあるようです」と細田さんは説明する。

同館では、中也への関心や研究を深めてもらうとともに、資料の経年劣化や災害による損失を防ぐために、デジタルアーカイブ化を進めている。詩の原稿や日記・書簡のほか、小学生の頃の作文や習字など、自筆資料の画像を館外からでも閲覧できるようにした。また、海外からの来館者に中也の詩を楽しんでもらうため、詩の朗読や解説

を聞ける多言語の音声ガイドを導入するなど、多くの人が中也の詩の世界に触れられるよう心掛けている。

SNSで情報を発信するだけでなく、中也ファンとの双方向の交流も意識しており、30周年記念事業ではTシャツデザインコンテストを催し、中也の詩をテーマにしたデザイン案を一般公募した。

### 中也のふるさとにつなぐ地域に誇りを

遠方のファンも楽しめるこうした新しい取り組みの一方、地域住民や子どもたちにもっと中也に親しんでもらうための活動にも力を入れている。「中也は金子みすゞのような童謡詩人ではなく、作品が難解な印象も影響して、授業で中也の詩を扱う機会は少ないようです。山口で育った人たちに、中也がいたことを誇りに思い、覚えてもらえるように、特に子どもたちに向けて、中也の存在や作品を知る機会をつくっていきたくて考えています」と細田さん。2016年からは山口市内の小中学生を対象に、詩のコンクール「ぼうしの詩人賞」をスタート。平均すると毎年約200件の応募があ

る。表彰式では朗読を好んだ中也になみ、入選者による朗読の場も設けている。また、山口市の中学生向けに中也の詩を題材にした副読本を作成して配布したこともあり、現在も依頼があれば中也に関する出前授業に出向く。その他、18歳以下は入館無料とし、館内では親しみやすくクイズ形式で中也を紹介するなど、子どもたちも楽しめるように工夫を凝らす。

分の好きな中也の詩の一節をカードに書いて、来館者と学生たちが交換し合うイベントで、中也の詩に曲をつけて歌ったり、折り紙で帽子をつくる子ども向けのコーナーを併設したりと、来館した中也ファンと心を通わせるものとなっている。「地域活性化という面では、地域外のお客さまを呼び込むことも大切ですが、地元の方々に中也を知ってもらい、愛着を持って足を運んでもらうことも使命であると捉えています」と細田さん。

小中学生向けの活動だけでなく、大學生と協働した活動も行っている。記念館では毎年、中也の命日である10月22日を「中也忌」とし、中也の墓の前で朗読を行う「墓前祭」をはじめ、その後で複数のイベントを開催している。その一つである「メイシ交換会」は、同じ市内にある山口市立大学学生有志により運営される定番企画だ。自

己の好きな中也の「名詩」を書いたカードを交換する

「メイシ交換会」は、同じ市内にある山口市立大学学生有志により運営される定番企画だ。自己の好きな中也の「名詩」を書いたカードを交換する



企画展やテーマ展示では、新たな角度から中也の詩の世界を深く追究する



未発表の作品「雪が降つてある……」の自筆原稿。デジタルアーカイブ化され、記念館公式サイトからも閲覧が可能(ノート小年時、12ページ目)



「ぼうしの詩人賞」最優秀賞受賞者(前列中央)には、トロフィーではなくネーム入りの黒い山高帽が贈られる



「中也忌」関連イベントの「メイシ交換会」。山口市立大学の学生有志と来館者が、自分の好きな中也の「名詩」を書いたカードを交換する



近隣の湯田温泉観光回遊拠点施設「狐の足あと」のカフェメニュー「中也のカフェラテ」。記念館とセットで訪れる人が多く、周辺地域への周遊も期待される



中原中也記念館 総務担当 細田萌美さん

中原中也記念館  
山口市湯田温泉1-11-21  
https://chuyakan.jp/

※イマーシブ…没入型や没入感を意味し、劇場やゲームの観客参加型演出や、VRなど体感装置でリアリティあふれる世界に没入する体験などを指す



志の高い生産者、飲食店と共に  
良質な肉をブランディング。  
和牛の食文化を  
地域に根付かせる

株式会社HANAFUSA 代表取締役

花房 稔

(鳥取市)

profile

花房 稔(はなふさ・みのる)

1970年鳥取市生まれ。鳥取城北高等学校を卒業後、水産会社を経て、日本ハムグループの食品会社に入社。食肉卸部門の営業職として勤務。2003年「お肉のはなふさ」を創業し、2005年に株式会社はなふさとして法人化。2024年11月株式会社HANAFUSAに社名を変更。鳥取のほか、大阪、兵庫、岡山、広島1府4県に営業所や販売店を構え、従業員数は75名(2024年7月時点)。売上高は約32億円(2024年3月期)。

文/入江 太日利 写真撮影/大野 方裕

地元で和牛の食文化を  
根付かせたい

鳥取の空の玄関口、鳥取砂丘コナン空港から東に約3kmの場所に、精肉店にレストランを併設した「Boucherie Hanafusa」がある。2024(令和6)年11月にオープンし、ステーキやハンバーグ、焼き肉など自慢の肉を使った26種のメニューに老若男女が舌鼓を打ち、多くの人でにぎわう。

運営するのは株式会社HANAFUSA。オリジナルブランド和牛「万葉牛」

や「花乃牛」をはじめ、鳥取や鳥根の和牛など高品質の牛肉を中心に、食肉の卸売りや加工、小売りなどを手掛ける。卸売りの拠点を鳥取、岡山、兵庫、大阪に構えるほか、鳥取県内3店と広島県内1店の直営精肉店で対面販売の小売りも展開する。さらに、オンラインショップ「肉匠はなふさ」を運営し、厳選した肉を全国の和牛ファンに届けている。「生産者に会いに出向き、実際に食べて、おいしいと感じたお肉だけを取り扱っています」と信念を語るのが花房稔社長だ。創業前は大手食品メーカーの営業担当

肉質の良さが次第に評判を呼び、兵庫や岡山にも拠点を設けて事業を拡大していった。

品評会で高い評価を受ける  
鳥取いなば万葉牛

万葉牛を名乗ることができる条件は、鳥取県産の黒毛和種の霜降り(サシ)の具合や肉の縮まり具合などを示す「肉質等級」が4以上で、花房氏が会長を務める万葉牛生産流通組合(鳥取市)の認定を受け、JA鳥取いなば(同)に出荷することだ。現在は鳥取県内の六つの認定農場が出荷する月平均20頭ほどが万葉牛として流通している。「量は決して多くはないですが、当社の

たが、地元で肉質の良い牛を見たことをきっかけに、良質な和牛の産地地消を目指すようになる。しかし、「鳥取の和牛は硬くておいしくない」という誤ったイメージが地元で浸透してしまっており、販路の開拓に苦戦を強いられた。ようやく買ってくれる顧客を見つけても、仕入れ値の半値まで値切られるようなありさまで、「持ち出しが多く、しばらくは厳しい経営状態が続きました」と花房社長は振り返る。

「志の高い生産者さんたちの良質な肉を適正価格で地元で販売できるだけの力がまだついていなかったため、まずは良質な和牛をきちんと評価するマーケットがあるところに出ました」

2010(平成22)年に大阪に進出。



1 2024年11月にオープンした「Boucherie Hanafusa(ブッシェリーはなふさ)」。精肉店にレストランを併設し、HANAFUSA自慢の肉が堪能できる

2 オリジナルブランド万葉牛のローストビーフ

3 万葉牛のすきやき用ロース肉。脂の口溶けがよく、さっぱりとした後味のため、女性や年配の方からも好評だという

写真提供/株式会社HANAFUSA

主力商品。霜降りでもおかわりができると言われるほど、あっさりとした口溶けで、くどさが少ない、キレのある脂が特徴です」と花房氏は胸を張る。

また、オリジナルブランド和牛「花乃牛」は、出荷までの月齢が30カ月以上の雌牛で同社がセレクトして提供するものだ。

「産地を限定して〇〇牛と銘打つのではなく、どこで生まれ、どういう餌を食べ、どういう人が育てたか、などを当社がしっかりと確かめてブランディングしています」

**生産者や飲食店と協力し  
四方良しの経営を目指す**

国が増産を促進してきた和牛を取り巻く環境は近年、様変わりしている。肉質等級で最高級である5等級の割合は2023(令和5)年に全国で6割を超え、10年前の2割台から大幅に伸びているという。品種改良や飼養技術の発展などにより、いわゆる「A5」ランクの希少価値が薄れているのだ。さらに、高齢化や健康志向の高まりや価格の高さから、サシの多い5等級を敬遠する向きや、物価高による牛肉需要の伸び悩みが重なり、和牛の価格が低迷している。ロシアのウクライナ侵攻や円安による飼料の高騰なども追い打ちをかけ、生産者の経営は一層厳しさが増している。





株式会社英田エンジニアリングの万殿貴志社長

# 人を大切にし、苦境の中でも前向きな投資に挑み、発展につなげる

## 株式会社英田エンジニアリング〈岡山県美作市〉

文／倉恒弘美 写真撮影／富岡誠

### 冷間ロール成形機を基幹に 駐車場管理システムも展開

岡山県北東部、中国山地の山あいに位置する美作市。ここに本社を置く株式会社英田エンジニアリングは、冷間ロール成形機・造管機や無人駐車場管理システムなどの自社ブラン

ド製品を全国に展開する研究開発型の産業機械メーカーだ。

1974（昭和49）年、3人の技術者が地元への貢献を目指して英田郡英田町（現・美作市）に製造業の小さな会社、有限会社アイデアエンジニアリングを設立した。帯状の鋼板をさまざまな形状に効率よく成形するフォーミングロールという金型の製造からスタートし、その2年後には、金型だけでなく機械本体である冷間ロール成形機・造管機の製造も開始した。これらの製品は現在も主力製品として会社を支えている。

同社では創業以来、「ちよつと進んだモノづくり」をモットーに、自社ブランド製品にこだわり、開発と製造を行ってきた。1980（昭和55）年には現在の場所に本社工場を建設

し、その後、組織変更に伴い商号変更を行った。

順調に業績を伸ばしていたところ、バブルの崩壊が訪れる。ただ、同社にとってはこれが事業を拡大する転機になった。大手不動産会社が、日本中に発生した遊休土地の有効活用方法としてコインパーキングを全国に展開する計画をスタートさせ、一連のシステムの製造を同社で手掛けることになったのだ。

「もともと取引をしていた設計士の方との縁で、まずは車をロックする装置のフラップ板を製造させてもらいました。当初は支給された図面で製造していたのですが、改良案を示したところ採用され、システム全体を自社で開発し供給することになったのです」と、当時の担当者で現・代

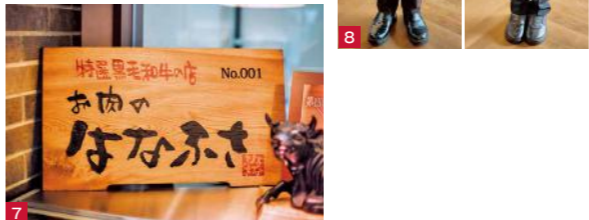


基幹製品の冷間ロール成形機・造管機。コマ状の金型（フォーミングロール）を並べた隙間に帯状の鋼板を通すことで、さまざまな形に効率よく成形する。成形品は建築や自動車、鉄鋼など幅広い分野で利用されている



冷間ロール成形機に組み込まれるフォーミングロール

写真提供／株式会社英田エンジニアリング



- 4 良質な家具やアートに囲まれた新社屋の休憩室
- 5 2024年11月にオープンした、スパイラルガーデン大州（広島市）内の直営店「特選黒毛和牛の店 お肉のはなふさ」
- 6 店頭では社長自ら厳選した「極乃雌牛」などを販売。脂のキレがよく、うまさに定評のある肉だ
- 7 創業時に掲げた看板を広島店の店先に。「一から和牛の食文化を創る」という想いが込められている
- 8 精肉店の固定観念を変えるべく、ユニフォームも自社でデザイン

写真提供／4・8 株式会社 HANAFUSA



株式会社 HANAFUSA  
鳥取市湖山町東3丁目60  
☎0857-30-4129  
https://hanafusa-meat.jp/

writer  
入江 太日利（ひりえんたかとし）  
1970年福岡県生まれ。大学卒業後、業界新聞、経済誌などを経てフリーライターに。取材記事を幅広く執筆することにも、写真撮影なども手掛けている。

そうした状況下で、同社は生産者、飲食店、卸売業の全てが豊かになる経営を実践している。生産者も飲食店も適正な利益を得て事業を継続できるように、肉に込められた想いや特徴を伝え、ブランド戦略を共に考えていく。この理念に共感する生産者や飲食店が同社を介してつながり、協力し合う関係が構築されている。

「みんなが笑顔で酒を飲む幸せな状況がつけられたらいいなと思っています。生産、流通、販売、さらに消費者も含めて、四方良しを目指しています」

靴のいでたちが連想される「精肉業に対するイメージを変えたい」と意気込む。社員の個性を生かして自社にデザイン部署を設け、ロゴや動画の制作だけでなく、Tシャツやパーカー、ダウンジャケットといったユニフォームのほか、飲食店のメニューのデザインなども手掛ける。さらに、配送トラックの荷台のデザインに工夫を凝らしたり、店舗をカフェ風の外観にしたりと、若い人が働いてみたいと思えるような空間づくりにも力を注ぐ。

2024年に新築移転した鳥取市湖山町の本社社屋は「従業員の休憩室に一番お金をかけて、ドイツのインテリアブランド『KARE』の家具でポップな雰囲気に仕上げました」と花房社長は笑う。「がんばって働いた後の休憩ですから、

元気になるよう、良質の家具に囲まれた空間にしてフリードリンクも備えました。社長ができる、ささやかな気持ちは」と、細やかな心配りも忘れない。

**地域の食材を誇りに思えるように**

同年11月、広島市南区に地元産の食材を扱う飲食店や交流スペースを備えた商業施設「スパイラルガーデン大州」がオープンした。同社はその施設内に直営店「特選黒毛和牛の店 お肉のはなふさ」を出店した。店先には創業時に掲げた看板を飾り、花房社長も店頭に立つ。客からの多くの問い合わせがあるにもかかわらず、万葉牛は販売せず、社長自らセレクトした広島牛を中心に販売し

「初心に帰って一から和牛の食文化を創っていくという気持ちで、広島に出店しました。地元牛が高く評価されれば、皆さん誇りに思いますよね。その一助になるように、広島食文化として育てていきたいですね」

2005年の法人化以降、同社は増収増益を達成し続けてきた。質の高い肉を取り扱う精肉店として、今後は全国に営業所を出し、売り上げを現在の約35億円から100億円に伸ばすことを目指している。

「肉で地域に文化を創る、肉を食べるために人が訪れるまちを鳥取県に創りたいというのが創業時からの想い。その想いは今も変わっていません」と花房社長は語る。



1 段差やカバーのないバリアフリー設計の「ゼロフラップ」。フラップ板を押し下げられないようにすることで不正出庫を防止  
 2 ボラードを個人向けに開発した電動式の自動車盗難防止装置「i/lock」。バリアードの上昇・下降は小型リモコンで操作し、足などが挟まれないような安全機能も備えている  
 3 国土交通省認定の後付け安全運転支援装置「アイアクセル」。パニックを起こしたときにアクセルペダルを強く踏み込んでも車が加速せず、ブレーキが緩やかにかかる

写真提供 / 1・2 株式会社英田エンジニアリング

日本大賞」製品・技術開発部門で中国経済産業局長賞を受賞している。

また、駐車場全体の安全性と快適性を追求し、IT技術と融合したシステムの開発にも力を入れてきた。駐車場の利用状況のデータを解析し、段差のないゼロフラップと組み合わせ、より駐車しやすく、安全安心な駐車場レイアウトをデザインする「PETAシステム」は全国で導入が進んでいる。

他にも、重要施設への不審車両の進入を防ぐ杭状のバリアード装置「ボラード」も長年研究と開発を重ねてきた。そのノウハウを生かして誕生

した個人向けの電動式自動車盗難防止装置「i/lock」は、盗難被害の増加傾向を背景に需要が高まっている。

**営業力や開発力の強化で荒波を乗り越える**

3人で始まった同社は、130人以上の社員を抱える会社に成長した。同社の無人駐車場管理システムは、現在、全国で約40%のシェアを誇る。しかし、これまでの道のりは常に順風満帆だったわけではなく、2008（平成20）年のリーマンショックでは大きなダメージを受けた。「リーマンショックは私が社長に就任

して2年目の時に起こり、利益は3分の1まで落ち込みました。私や、製造部門の管理職も総動員で営業に回りましたが、彼らは営業は未経験だったので、本当に苦労しました」

製造部門の管理職が営業に参画した当初は彼らの反発もあったというが、営業先で顧客の要望を直接聞くようになると意識が変化し、営業と製造の強い協力関係が築かれた。それに伴い売り上げも伸びて、リーマンショックから4年後にV字回復を果たしている。

コインパーキング事業は他の事業に比べてリーマンショックの影響は

受賞し、高い関心を集めている。

**創業以来受け継ぐ人を大切にす経営**

同社は創業以来「モノづくり＝人づくり」という考えの下、人材育成や福利厚生の充実、地域の活性化に取り組んできた。毎月、人間学を学ぶ月刊誌『致知』の感想文を持ち寄る「心学塾」もその一つだ。人間力を養うとともに、部署を超えて交流

することで、風通しの良い職場環境づくりにつながっている。

2020（令和2）年には、社員の健康増進のために福利厚生棟の社員食堂「AIDINING」と、ジムと坐禅道場の「AIDOJO」を建設した。食堂のメニューは社員の要望を踏まえて管理栄養士が献立を組み合わせ、昼休憩時には多くの社員でにぎわう。地域住民も予約をすれば利用でき、近隣には飲食店がほとんどないた

め喜ばれているという。

ジムには専用の機器をそろえ、専属トレーナーが全社員のカウンセリングと運動メニューを考案している。坐禅道場では月1回、リフレッシュや集中力の向上を目的に、全社員が参加する坐禅会を行っており、工場内の事故予防につながっている。

また、住宅補助では、美作市内に新築住宅を購入すると合計300万円の補助金が会社から支給され、定住にも結び付いている。2棟ある社員寮もリノベーションで間取りや設備を一新し、常に満室状態だ。寮にはベトナムやスリランカなど外国籍の社員も暮らし、日本人の先輩社員や寮生がボランティアで週2〜3回日本語教室を開き、交流を深めている。

こうした先進的かつ魅力的な会社づくりが、県内外の若者や海外の優秀な人材の目に留まり、社員の平均年齢は30代後半と、山あいの小さなまちとしては驚くべき水準だ。また、ベテラン社員も大切に続け、定年を迎えた後でも工場で働ける体制を築いており、高齢で工場での作業が難しい社員や、地域の障がい者の就労場所として、耕作放棄地を活用したアグリ事業も立ち上げた。にんに



4 社員食堂「AIDINING」。社員の要望を踏まえ、管理栄養士が献立を組み立てる  
 5 ジムでは専属トレーナーが全社員のカウンセリングと運動メニューの考案を担当する  
 6 坐禅道場では月に1回、全社員が坐禅会に参加する  
 7 栄養バランスの取れた食事や県産材を使った空間は健康環境に適している  
 8 社内の催しや交流を伝える社内報「あいだより」と会社の理念をまとめた手帳「英田エンジニアリング フィロソフィ」



株式会社英田エンジニアリング  
 岡山県美作市三保原678  
 ☎0868-74-3637  
 https://www.aida-eng.co.jp/

writer  
 倉恒 弘美（くらつねひろみ）  
 鳥取県倉吉市出身、東京の出版社勤務を経てフリーライターに。Uターン後、鳥取県を中心に山陰の情報誌やPR誌で活動する。

# 徳佐りんごのシードルで 農・食・人をつなぎ 山口の食文化を盛り上げたい

やまぐちシードル 代表

原田 尚美 《山口市》

西日本最大規模のりんごの産地である山口市の阿東徳佐地域。この地域の特産品「徳佐りんご」を原料としたシードルの企画販売を行う原田尚美さん。日々、りんご農家や地域の人々の思いをつなげながら、事業に励んでいる。



文/村尾 悦郎  
写真撮影/横埜 守貢

profile

原田 尚美  
（はらだ・なおみ）

1983年生まれ。山口市（旧・小郡町）出身。関西の大学を卒業後そのまま就職、14年ほど関西で生活した後、2016年に山口市地域おこし協力隊制度を利用してUターン。2019年にシードルの企画販売を行う「やまぐちシードル」を創業。任意団体「阿東を盛り上げたい女性のネットワーク（通称：あともり）」の代表も務める。

## 夢を実現させるため Uターンを決意

山口市のJR新山口駅から車で5分ほどの住宅街に「やまぐちシードル」の販売所はある。シードルとは、りんごから造った発泡酒だ。やまぐちシードルでは、市北部にある阿東徳佐地域で栽培される「徳佐りんご」を使っている。レギュラー商品は2種類あり、辛口の「UMI」は海の幸を、甘口の「YAMA」は山の幸を引き立てる。代表の原田尚美さんは、山口市（旧・小郡町）出身で、大学進学を機に関西へ出て約14年を過ごした。

「あの頃は地元が窮屈に感じられて、とにかく都会に出たかったです。大学を卒業してからも『帰りたくない』という思いからそのまま就職したものの『自分が本当にしたいことはなんだろう？』とモヤモヤしていました」と、当手を振り返る。

原田さんはワインや食への関心が高く、週末になると全国各地さまざまな場所に出かけては、棚田の保全やぶどう農家の援農ボランティア活動などに参加していた。そうした経験を重ねるうちに、いつしか「農・食・人をつなぐ場所をつくりたい」という思いが芽生えたという。そんな折、山口市が「地域特性を踏まえたビジネスモデルの構築」を目標とする地域おこし協力隊の隊員を募集していることを知った。かつては地元に戻りたくないという思いを抱いていたが、原田さんはすでに山口の魅力に気づけるようになってい



1 地域おこし協力隊の任期中に立ち上げた「やまぐちシードルプロジェクト」  
2 西日本最大規模を誇る阿東地域のりんご農園。糖度が高く非常に甘いのが徳佐りんごの特長だ  
3 シードルの本場スペインで視察  
写真提供/やまぐちシードル

た。「山口で自分のやりたいことができるかもしれない」という期待から、2016（平成28）年にUターンを決意した。

## 徳佐りんごと出会い、 シードル造りを学ぶ日々

協力隊員の任期は3年だった。当初はワイン造りを目指し、ぶどうの木を植える場所を探していたが、半年ほどで転機が訪れる。「活動中、阿東地域で徳佐りんごを栽培する農家の方と出会い、山口にはりんごという素晴らしい資源があることに気づいたんです。これを生かすべく、ワインではなくシードル造りに挑戦することにしました」

2017（平成29）年9月にシードルのプロジェクトを立ち上げ、まずはシードルの試飲やりんご栽培の体験イベントを企画。産地と人をつなげつつ、シードルを周囲に知ってもらう機会をつくった。また、りんご農家の手伝いや収穫シーズンの販売アルバイトなども経験し、一年を通して果樹の世話に励む農家の苦労にも触れた。

翌年3月には酒類の試験製造免許を取得。知人に紹介してもらった醸造家から技術を学び、地方独立行政法人山口県産業技術センターの協力を得て味

や成分を数値化し比較するなど、試験製造を続けた。また、シードルの本場スペインで、シードルが根付く食文化やシードル造りの現場を視察した。商品開発の一方で、起業プロセスや収益構造を学ぶセミナーに通うなど創業に向けた準備も着々と進めた。

こうした活動中にも常に自分の目標を発信し続けたことで「シードル造りは順調？」と声をかけられるようになり、人脈が広がって仲間も増えていった。中でも、阿東地域の女性たちとの交流は、2019（平成31）年2月、任意団体「阿東を盛り上げたい女性のネットワーク（通称：あともり）」の結成へとつながった。月1回の「女子会」では雑談も交えながら自分たちの「やってみたいこと」を持ち寄って話し合い、賛同したメンバーと共に企画を進め、これまでに観光マップづくりや農産品の加工、SNSで地域の魅力を発信するなど多くの活動を展開してきた。数人の同年代の仲間と始めた活動だが、今では60人以上がメンバー登録し、年齢も20〜70代と幅広い。

## 自然災害を逆手に取った 新商品を開発

「あともり」結成と同じ2019年、協力隊の任期を5月に終えると、いよ

【島根県出雲市】

# 天 穩 生 配 純 米 酒

シジミのんにく醤油漬け



板倉酒造株式会社  
島根県出雲市塩冶町468  
☎0853-21-0434  
https://www.tenon.jp/  
料理協力：粉家こん吉堂  
島根県出雲市今市町120-2



JR出雲市駅から車で5分。民家の  
中にそびえる煙突が見えたら、そこが  
板倉酒造だ。創業は1871(明治4)  
年。島根県産米を自家精米し、出雲北  
山山系の中硬水の湧き水で仕込む。  
地元の人々に愛される銘柄「天穩」は、  
1916(大正5)年に世界と未来の  
平和を願って伝典の無窮天穩という言  
葉から命名され、今に続く。  
板倉酒造では、2009(平成21)  
年ごろから自然の力を活用した、昔な  
がらの生配・山廃造りに取り組んでい  
る。杜氏の小島達也さんは15年前に愛  
知県からIターンした。杜氏になって  
10年だ。出雲杜氏の山陰吟醸造りの技  
術を受け継ぎながら、これを生配が生  
み出す強靱な酵母と掛け合わせている。  
50%まで米を削った純米大吟醸の生配  
など、幅を広げて「無窮天穩」シリ  
ーズをブランド化した。アルコール度数  
を下げて飲みやすくしたものもある。  
天穩の山陰吟醸の米麴は、うま味を  
出すため菌糸がしっかりと食い込むよう  
3日以上かけて製麴していることから  
「突きハゼ三日麴」と呼ばれる。さらに、  
5年前には全量純米酒に移行した。  
また、酒造りの根源に思いを寄せる  
小島さんは、生配造りにとどまらず、

乳酸発酵した酸性水を用いた水配造り  
や、雑穀入りの発泡どぶろくにも挑戦  
している。自然の営みの中では思い通  
りにいかないこともあるが、6代目社  
長の板倉啓治さんは「世の中の変化に  
対応するためには新しいものに取り組  
むことが必要です」と小島さんの挑戦  
を後押しする。今までの日本酒のイメ  
ジから外れる味わいになっても、思い  
がけず好評を得て、それが他にない面  
白い酒として新たなファンをつくるこ  
ともある。チャレンジしてこそ見える  
ことがあるのだ。  
今回紹介するのは、板倉酒造が初め  
て生配に挑戦した時の造りを継承した  
奥出雲産改良雄町70%精米「天穩生配  
純米酒」だ。丁寧に燗をつけていただ  
くと、その名のごとく、優しく沁み入  
る味わいに心が和む。肴はシジミの  
んにく醤油漬け。にんにくと唐辛子の  
効いたシジミのうま味が広がる口の中  
で、燗酒をまとうと、さらに芳醇さを  
増して余韻を残す。徐々に燗酒の温度  
が下がっていくと今度は穏やかな酸が  
顔を出す。ふと裏ラベルを見ると、「滋  
味深く心に余韻を届けたい」と書かれ  
ている。表情豊かな味わいをゆるりと  
楽しむには熱燗がおすすすめだ。

いよ9月にやまぐちシードルを創業し  
た。栽培・醸造・企画販売の工程のう  
ち、自身は企画販売に専念することに  
決めたという。

「これまで出会ったりんご農家や醸造家  
の皆さんは素晴らしい方々で、原料の  
生産から加工・販売までを自分一人で  
行うのではなく、皆さんの思いをつな  
ぐことが自分の使命だと感じました」

長野県の醸造所に製造を委託し、完  
成した2種のシードル「UMI」と「Y  
AMA」の販売を翌年2月に開始した。  
開発にあたり気をつけたのは、糖度  
の高さが特長である徳佐りんごのおい  
しさをそのまま生かすことだ。完熟り  
んごの糖分のみでアルコールを発生  
させ、添加物を抑えて香り高く仕上  
げた。さらに、アルコール度数が7%



4 5 あともりメンバー  
で作成した「あともり  
MAP」は春夏秋冬の4  
種があり、季節に合  
わせた阿東の楽しみ  
方が紹介されている  
6 台風被害で落果したり  
りんごを、あともり学  
生に声をかけて拾い  
集めて洗浄、300kg  
を買い取って新商品  
「KAZE」を開発した  
7 8 2024年9月に移転  
オープンした「やまぐ  
ちシードル」販売所  
写真提供/  
4~6 やまぐちシードル

の「UMI」に対し、「YAMA」は  
4%と低アルコールで飲みやすくして  
いる。原田さんは商品の魅力を直接伝  
えながら販売したいと、自宅の軒先に  
小さな販売所を設けた。  
初年度に製造したシードル500本  
は、創業前から行っていた周囲へのPR  
が功を奏し、販売から2週間後にはほ  
ぼ完売となった。翌年以降も口コミで  
販路は拡大し、最近では原田さんの活  
動に興味を持った販売店から直接連絡  
が入るケースもあるという。  
事業は順調に滑り出し、翌年の  
2020(令和2)年には多くのイベ  
ントでPR販売を行う予定だったが、  
コロナ禍に見舞われネット販売への注  
力を余儀なくされた。  
その年、多くのりんご農園で台風

による落果被害が出た。原田さんは落  
果した完熟前のりんご300kgを買い  
取って新商品の開発を決意。費用はク  
ラウドファンディングで集め、糖度の  
低い未熟なりんごならではの酸味・渋  
味を生かした爽やかな味わいの新シ  
リーズ、「KAZE」を誕生させた。  
「農家の皆さんが大切にりんごを育て  
ている姿には感服するばかりで、そん  
な大切なりんごを「一つも無駄にしな  
くない」という思いを込めました」と  
原田さん。翌年以降も、摘果(果実の  
間引き)や落果で廃棄処分されるはず  
だった完熟前のりんごを買い取り、限  
定商品として不定期に製造、販売を続  
けている。  
コロナ禍が落ち着いてきた頃からイ  
ベント出展を再開すると「これを飲ん  
でみたかった」という声を聞くなど、  
やまぐちシードルの浸透を実感する場  
面が増えたという。  
2023(令和5)年は原田さん  
のこれまでの活動が評価され、総務  
省「令和4年度ふるさとづくり大賞」  
個人表彰、「令和5年度山口県女性活  
躍推進知事表彰・女性のチャレンジ  
賞」を受賞した。また、会長を務め  
るあともりにも、コープやまぐち「第  
17回女性いきいき大賞」優秀賞が贈  
られた。



シードルで農・食・人をつなぐ  
創業5年目となる2024(令和6)  
年9月、自宅から程近い場所に新たな  
販売所をオープンした。広めのスペー  
スを取り、今後は販売に加えてカフェ  
営業や、シードルと合わせた山口の海  
の幸・山の幸の料理を楽しむイベント  
を行っていききたいという。  
「将来は、活動の原点となった思いを  
形にすべく、農・食・人をつなぐ拠点  
を、徳佐りんごの産地である阿東に構  
えたいです。現地に醸造所もつくって  
販売を行いつつ、地域の人たちと訪れ  
た人たちが交流できるような仕掛けが  
できたらいいですね」  
地域の宝である徳佐りんご地域の  
人々との思いをつなぎながら、原田さ  
んとやまぐちシードルがつくる人の輪  
は広がり続ける。  
writer  
村尾 悦郎(むらおえつろう)  
山口県長門市在住。ライター/編集者  
長門市地域おこし協力隊を経て地域の  
人・食・風景の魅力を発信する「ながと  
と編集室」で活動中。

YAMAGUCHI CIDRE  
やまぐちシードル  
山口市小郡山手上町13-10  
https://yamaguchi-cidre.net/

# 岩国行波の神舞

ゆかば

かん

(山口県岩国市)

7年期に一度の式年祭では、河川敷に神殿を建て、15時間以上かけて全12座の舞を奉納。中でも、高さ25mの松の木に登る「八関」の舞が見どころで、その迫力は観る人に感動を与える。



1 2 3 式年祭では、錦川の河川敷に舞場となる約7.2m四方の神殿と、高さ25mの赤松の木が1本設置される。全12座の舞のうち、中盤に奉納される「八関」では、最後に白装束の「荒神」が松に登って木の上に祀られた「三光」を燃やし、地上に渡した綱を伝って頭から降りる  
4 5 6 日本書紀や古事記などの神話が基になった演目も多い。演目により、羽織る神服、面、採物が変わる  
7 練習が行われる「岩国行波の神舞伝承館」の伝習室。式年祭で建てる神殿を模したもので、天井は約8mの吹き抜けとなっている

## 神官より里人に受け継がれ古式に忠実に守り伝える

岩国市の錦川下流、標高405mの雲霞山の山麓斜面にある行波は、40戸ほどの集落だ。「岩国行波の神舞」はここで350年以上大切に守られてきた。1668(寛文8)年に当時の鎮守社・諏訪大明神の秋季例祭に奉納された舞が行波における記録上の最初の神楽だ。後に対岸の鎮守社と合祀、新たな行波の鎮守社となった荒神社(現・荒玉社)の遷座・合祀祭にて1791(寛政3)年に奉納された「願舞」が、現在の式年祭の初回となった。その後、世襲神職による神官神楽「社家神楽」として受け継がれていたが、修験道や陰陽道などの影響を受けた神楽が各地に存在したことから、王政復古をうたう明治政府の神仏分離政策に伴い、神職が神楽を舞うこと自体も禁止され、それ以降は里人たちが伝承を担う「里神楽」となった。「松の木の伐採をはじめ、資材調達など、式年祭に関わる全ての準備を毎回2年がかりで計画的に進めています」と保存会会長の安村道典さん。「先人たちの思いを継ぎ、生活の一部、当然の使命として続けてきました。地域のための神舞であり、地域あつての神舞。行波になくしてはならない存在です」

本祭当日は、前夜祭でも奉納される三つの演目から始まる。子ども3人2組が恵比須を讃えて舞う「六識幸文祭」、神迎えの「諸神勧請」、悪霊の侵入を防ぐ「注連瀧水」だ。続いて、出雲神話を基にした「荒霊武鎮」や「天津岩座」など、15時間以上をかけて全12座が奉納される。中でも、高さ25mの松の木に登る「八関」は最大の見せ場であり、注目が集まる。

衣装は黒の紋付袴、頭には風折烏帽子。演目に合わせて赤や青の神服を羽織って面を着け、神殿に入る者は必ず木綿手織を首に掛ける。鈴、扇、太刀、矛、弓などの採物も演目により用いる。舞子は4人を基本とし、5人以上の楽士が太鼓、笛、銅拍子を演奏し、「四季の歌」を歌ったり、「謂れ」という問答を行ったりする場面もある。式年祭以外にも毎年10月、荒玉社境内において、このうち一部の演目を奉納する小祭りが行われている。奉納に徹し、次世代に継承

神舞を奉納する神楽団は、6〜67歳の

里人たちはこれまで伝統を忠実に守り伝えてきた。岩国をたびたび訪れた著名な民俗学者の故・宮本常一氏も継承活動に協力しており「古い祭礼舞踊が、伝承せられた当時のまま、ほとんど改変せられることなく、今日にいたっていることが大きな特色だ」と述べたという。地域一体となり神舞を伝承していくために1971(昭和46)年に国の重要無形民俗文化財に指定された。

## 7年期に一度の式年祭

6年に1回、7年期ごとに行う神舞の式年祭は一度も途絶えたことはなく、2025(令和7)年4月には40回目を迎える。式年祭では錦川の河川敷に、赤松の巨木8本で4間(約7.2m)四方の立派な神殿をこのためだけに特設し、神舞を奉納する。神舞で表現されるのは、五穀豊穡、天下太平、民の安穏など、自然に寄り添って暮らしてきた地域の人々の感謝と祈りだ。

約30人だ。隔週土曜の夜に集まって練習を重ねている。中には父子3代続く舞子・楽士もいるという。「時代は変わっても、若い人たちは楽しみ、子どもたちも喜んで集まってくれます」と話すのは団長の藤重英格さんだ。常に次世代への継承を念頭において指導に励む。練習場は、荒玉社の近傍にある「岩国行波の神舞伝承館」だ。同館は、衣装や面、道具、写真などが展示され、民俗芸能の保存と、伝承活動の促進ならびに交流活動の場とすることを目的に1999(平成11)年に開設された。

岩国行波の神舞は、観光イベントや他団体とのコラボレーションは行わないが、他の神社からの要請には可能な限り応え、子どもを含む神楽団が赴いて神舞を奉納する。「神舞は見世物ではなく、奉納するもの。先人たちが守り伝えてきた本質を、確かに、ただ伝えていくだけです」安村会長と藤重団長が口をそろえた言葉には、厳かな伝承の極意が表れていた。



岩国行波の神舞保存会会長の安村道典さん(左)と神楽団団長の藤重英格さん

岩国行波の神舞保存会  
【拠点】岩国市行波(岩国行波の神舞伝承館)  
【連絡先】岩国市文化スポーツ振興部文化財課  
☎0827-29-5098



舞には、反間(へんばい)と呼ばれる両足を小早く踏み替える独特の足運びが多用される

三次が舞台の妖怪物語  
《稲生物怪録》にちなんで開館

広島県北部の三次市は、江の川の支流が三次盆地で合流する地形を背景に、山陰・山陽を結ぶ交通の要衝として繁栄した歴史を持つ。その三次市に2019（平成31）年4月に開館したのが、日本で唯一妖怪をテーマとした博物館である「湯本豪一記念日本妖怪博物館（三次もののけミュージアム）」である。

実は三次と妖怪の関わりは深い。江戸時代に記された妖怪物語《稲生物怪録》の舞台は三次市三次町で、主人公は16歳の少年、稲生平太郎という実在の人物であり、比熊山、魚の棚など現存する場所も物語に出てくる。

なぜ三次町を舞台にして物語が書かれたのかは定かではない。「三方を川に囲まれた三次町の独特の地形と、三次町で合流した江の川は南へ下らずに北へと流れて日本海に注ぐ不思議さ、そういうところが妖怪の棲み処を彷彿とさせたのではないか」と植田千佳穂館長は推察する。

開館にあたり、民俗学者で妖怪コレクターでもある湯本豪一氏からコレクション約5千点が寄贈された。「日本で唯一の妖怪博物館であり、ここなら常設展示ができると湯本先生は考えら

具などを展示する常設展示室「日本の妖怪」である。「ここでは、夏なら河童など水に関する妖怪やお化け、秋なら毛がもふもふとした動物の妖怪など、季節感を大事にした展示を心掛けています」と学芸員の吉川奈緒子さん。その横は企画展示室だ。2024（令和6）年秋と冬の企画展「ユカイ・ツカイ・妖怪ランド」では、江戸時代以降親しまれる存在となった妖怪たちがドジを踏んだり、散々な目に遭ったりして、見る者をくすりと笑わせるような作品が集められていた。

奥には、常設展示室「稲生物怪録」がある。《稲生物怪録》は30日間にわたって、平太郎の家に入れ代わり立ち

湯本豪一記念日本妖怪博物館

三次もののけミュージアム

日本人の暮らしに密着していた  
妖怪の世界を堪能



季節に合わせて展示替えをする常設展示室「日本の妖怪」

「親しみやすい展示で妖怪を身近に感じる」

博物館の館内は日本の妖怪や《稲生物怪録》をテーマとした常設展示室、寄贈コレクションを中心とした企画展示室、最新のテクノロジを用いてデジタルコンテンツを制作するチームラボ株式会社（東京都）とコラボした「チームラボ 妖怪遊園地」のエリアに分かれる。

エントランスホールには大型タッチモニターの「デジタル妖怪大図鑑」があり、画面上の妖怪をタッチすると詳しいプロフィールが出てくる。ここで妖怪の知識を学んだ後、分厚い扉を開けると、いよいよ妖怪の世界へと誘われる。薄暗い空間を進み最初に入る空間が、妖怪を扱った絵画や書籍、日用品、玩

毎月最後の日曜日に開催する「もののけの日」では、もののけたちがお出迎え



れたのでは」と植田館長は話す。

代わりいろいろな妖怪がやってくるが、平太郎は耐え抜き、最後は魔王に認められて妖怪たちが去っていくというストーリー。1日目、2日目と、毎日異なる妖怪が描かれていて、見る者を飽きさせない作品だ。

その隣には「チームラボ 妖怪遊園地」がある。自分で描いた絵が巨大な草原で動き出す「お絵かき妖怪とビーブル」、まるで妖怪と一緒に撮影しているような「妖怪カメラ」、タッチすると妖怪がリアクションする「妖怪が住まうテーブル」など、体験型のインタラクティブな展示は、小さな子どもから大人まで楽しめる。

「YOKAI（妖怪）」を世界の共通語に！

同館の来場者数は、開館年のゴール

デンウィークには2万8000人を記録し、コロナ禍を経て、2024年4月16日に累計来場者30万人を達成した。家族連れが多くを占めるが、同年1月2日の初来場者はオーストラリアからのカップルだったそうだ。

2021（令和3）年からは小泉八雲記念館（鳥根県）、水木しげる記念館（鳥取県）との3館連携事業「もののけ怪道にあそぶ。」を展開しており、周遊バスポートを購入すると3館をお得に回れるようになっていた。その他、国内の美術館、博物館へ所蔵品を積極的に貸し出し、妖怪をテーマとした企画展を支援している。

同年4月から独立行政法人国際交流基金が主催する海外巡回展「妖怪大行進」日本の異形のものたち」では、同館所蔵の高精細レプリカ資料55点を中

心に展示が構成されている。この巡回展はスロベニアを皮切りに、イタリア、ロシア、トルコなど14カ国を巡回しており、今後も通年で最長10年間活動する予定だ。恐怖だけでなく、なんとなく親近感があるのは日本の妖怪の特徴で、世界の中でも珍しい存在なのだという。「YOKAI（妖怪）」を世界の共通語にするのが目標」と植田館長。ユーモラスなYOKAIを世界中の人々に知ってもらうことを目指している。

館長 植田千佳穂さん  
コレクションを寄贈した湯本豪一氏とは20年来の知人。

学芸員 吉川奈緒子さん  
展示の企画を担当。「もう妖怪の魅力から逃れられません！」



画面をタッチすると妖怪のプロフィールが見られる「デジタル妖怪大図鑑」



「チームラボ 妖怪遊園地」内の「お絵かき妖怪とビーブル」。自分で描いた妖怪が巨大な草原の中で動き出す



常設展示室「稲生物怪録」の展示コーナー



《稲生物怪録》に関する内容を描いた「百物語絵巻」の一部。中央の妖怪は太い指で動くカニのような石の妖怪（三次もののけミュージアム蔵）

妖怪カメラで好きな妖怪と一緒に撮影

湯本豪一記念日本妖怪博物館  
三次もののけミュージアム  
広島県三次市三次町1691-4  
☎0824-69-0111  
https://miyoshi-mononoke.jp/



# 琴引山

ことびぎやま

《島根県》



山頂からは360度の眺望が開け、眼下にはスキー場や三瓶山、大万木山への縦走路などが一望できる



2



3



4

2 琴弾山神社に続く巨石に挟まれた参道は「産道」を表し、毎年9月23日の例祭には安産と子どもの健康を願う参拝者でにぎわう

3 神在月を前に山頂で行われる神迎え神事

4 巨岩が折り重なった大神岩

写真提供／

1・2・4 一般社団法人 飯南

町観光協会

3 KWAN

島根県中南部の高原地、飯南町にある標高1013・4mの琴引山は、『出雲国風土記』に登場する「神話の山」として知られ、山腹の岩窟に大国主命の琴が眠るとされる。さらに、神在月始まりの地であり、参集した神々はまずこの山へ降臨し、そこから流れる神戸川を頼りに出雲大社へ向かうとされ、古来、信仰を集めてきた。

登山道は五つあるが、琴引フォレストパークスキー場から佐見ルートで登る人が多い。グレンデの左手を上り、リフトの降り場付近の登山口から入る。緩やかな明るい杉林を抜け、十畳岩が現れるとここからは急登が続く。滝状に流れ落ちる弦の清水の前を渡り、山腹を折り返して苔むした大神岩の横を登ると、大国主命を祀る琴弾山神社だ。祠の裏から登山



地図製作：磯部 祥行

道に戻ると程なく、360度の眺望が開けた山頂に到着する。中世、この一帯は42の宿坊が並ぶ修験場であったという。帰りは古くからあるという敷波ルートで下山すると、岩窟の琴の岩屋の前も通ることができ、大国主命が琴を納めた地と伝わる大神岩と琴の岩屋の両方を行き帰りで見るができる。

一日も。百年も。



中国電力



中国電力ネットワーク



若い風ホームページ

©「若い風」VOL.112 2025年3月1日発行

発行人：井ノ本 瑞恵 編集人：城市 奈那

●企 画：中国電力株式会社 地域共創本部  
中国電力ネットワーク株式会社 総務部

●発 行：中国電力株式会社 地域共創本部  
〒730-8701 広島市中区小町4-33 ☎082(544)2759

●編集・制作：株式会社ジェイクリエイト  
〒101-0052 千代田区神田小川町3-7-13 ヴァンサンクビル6F ☎03(6273)7135